

るのほな

編集兼発行者

千葉大学医学部

るのほな同窓会報編集部

〒280 千葉市亥鼻1の8の1

千葉大学医学部庶務係気付

電話千葉(0472)22-7171内線2012

千葉大学医学部同窓会報 第71号 題字 鈴木五郎

千葉大学而立を祝う

本学の創立三十周年記念式典が小雨降る十一月十日、教育学部視聴覚教室で行なわれた。香月学長

の式辞は、五学部一研究所から八学部一教養部一研究所にまで発展して来た三十年の建学の歩みをふまえて、大学への期待と課せられた責務に應えるために、本来の大学を確立し

哲学科を出て人文科学研究所助手であった元文相は、当時ならびに三十年経った今日、見、聞き、考

結び、満場の聴衆に多大の感銘を与えた。新厚生施設食堂に席を変えた祝賀会は村山大学学術局長、木田国立研究所長、上左小笠原文学部長の挨拶に続く川喜田元学長の音頭に

各教室の配置計画は決定済みであるが、空室利用については、空室利用委員会が設けられており、本年十二月末までに順次決定されることになろう。

ついで稲井文部事務次官の挨拶、向坊東大学長、沼田千葉県副知事、相磯前学長の祝辞があり、国会議員や文部省、他大学からの来賓の紹介があった後、勤続三十年以上の教職員一五八名への感謝状が代表の白田教授に贈呈された。

少憩の後、永井元文部大臣の高等教育の展望と題する講演が行なわれた。千葉大学創立当時、京大

えたる事を対比して話を進め、最後に「大学とは何かと言うことを疑問とし続けることができれば、大

本学の首途の日であった。三十にして立つ。大人の大学としての

改修された各室は真新しいアルミドアやサッシュが取りつけられ、今までの赤錆びた重厚な鉄枠をみ

全教室の協調により、空室の利用等、新生教育研究棟が円滑に運営され、教育・研究の実がこれまで以上に上がることが期待される。



千葉大学創立三十周年記念式典

長月学香永上右
相元井永左
文部局長
村山大学学術局長、木田国立研究所長、上左小笠原文学部長の挨拶に

三十にして立つ。大人の大学としての

旧病院改修工事順調に進む

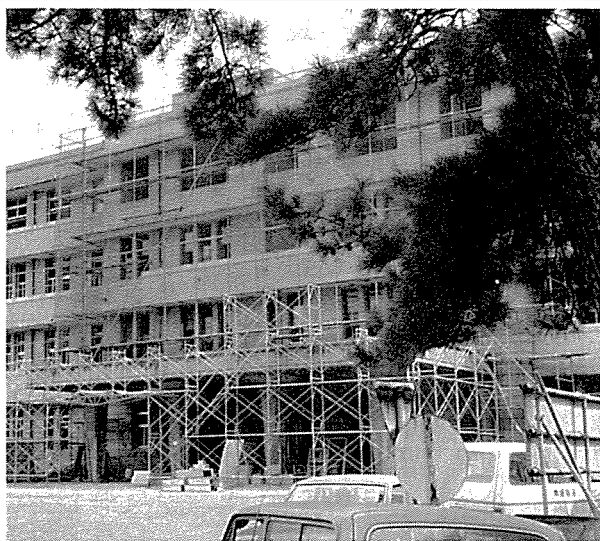
―臨床各研究室の仮移転が完了―

既報のように、旧病院の病室の一角であった南東四分の一の部の改修が五月一杯で完了し、六月から臨床各研究室が一時移転して、一年余に亘る仮住居生活が始まった。

各教室の配置計画は決定済みであるが、空室利用については、空室利用委員会が設けられており、本年十二月末までに順次決定されることになろう。

手狭な仮住居の不自由さを忍びながら研究活動が続けており、一日も早い改修工事の完了が待たれる。今後の日程として、昭和五十五

全教室の協調により、空室の利用等、新生教育研究棟が円滑に運営され、教育・研究の実がこれまで以上に上がることが期待される。



旧病院改修工事

54年10月

整形外科教室

開講25周年記念会

行なわれる

千葉大学整形外科科学教室は昭和二十九年六月十六日に鈴木次郎教授の就任をもって歴史が始まった。本年で開講二十五周年を迎えたわけで人に例えればいよいよ一人前の成人期を迎えた事になる。鈴木教授は創設期の苦しみを「紙一枚ない所から教室作りが創まった」と口ぐせのように云われていたが、その卓越した指導力と教室員一同の努力により脊椎外科を中心とした一連の業績が開花した。昭和三十九年には開講十周年記念講演会が盛大に行なわれ当時の同門七十有余名は更に教室の躍進を誓った。しかし開講十四年目にあたる昭和四十三年一月十一日心筋梗塞発作により鈴木教授は忽然として逝かれた。昭和四十三年九月一日井上駿一教授が二代目として就任し、脊椎外科を中心とした前代からの仕事を継受発展させる事を基本方針とした。折悪しく全国的に燎原の火の如く燃えさかした大学紛争、激しい学生運動の嵐が本学にも吹きすさび、その時代的影響を受け失うものもあったが、幸にも多くの教室員の努力に支えられ研究の灯は絶やすことなく守られた。ここ数年学内外もようやく落着きを取り戻し、昨年春からは念願の白亜の新病院での診療、教育も開始されるに至った。開講後四半世紀を経た現在、教室同門は一八八名

を数え、研究面においても主テマである脊椎外科は鈴木次郎教授より更に井上駿一教授によって受

と考えられたので昭和五十四年十月七日に開講二十五周年記念講演会および祝賀会を催した。

記念講演会には海外から香港大学ヤウ教授はじめ、本邦整形外科の最高権威者である天兒九州大学名誉教授、久留米大学宮城教授(日整会々長)、伊丹教授(慈恵会医大)、猪狩教授(岩手医大)ら十



附属病院第一講堂における記念式典

けつがれつつ発展し、広く国内外に発表され高く評価されているのみならず、研究分野も脊椎外科以外に徐々にその範囲を拡大しつつある。教室の業績をひとまず整理し一区切りをつけるに適當な時機

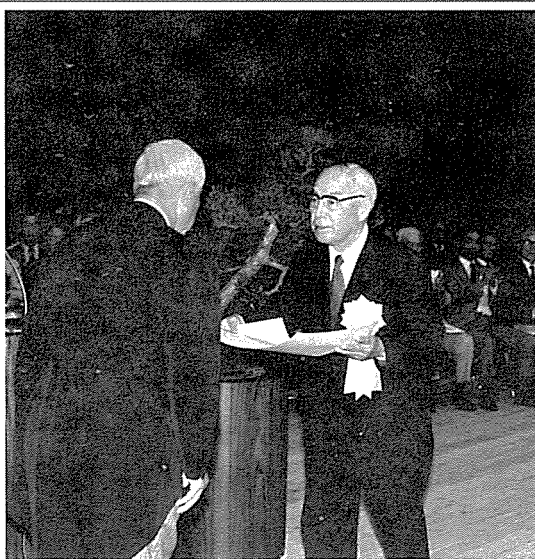
名の斯界の権威者が出席され、その蘊蓄を傾けた貴重な講演は、これを拝聴する約三百名の来賓、同門の心をとりえて実に重みのあるものであった。講演会終了後、引き続き千葉グラウンドホテルにて祝

賀会が催された。香月学長、相磯前学長、井出医学部長、佐藤病院長、中山恒明前教授、小林県医師会長ら本学関係者および日整会関係者の祝辞の後、永年勤続者二十名の顕彰が行われ、威勢のいい佐原ばやしの音色につつまれながら会は盛会裡に終了した。

小林金市同窓会長

日本対がん協会賞受賞

小林金市会長には、去る九月一日、日本対がん協会の本年度がん征圧全国大会の席上、日本対がん協会賞受賞の栄に輝いた。小林会長には、千葉市の加藤病院長として婦人科開業のかたわら、千葉県医師会長、日本医師会理事、千葉県対がん協会会長なども兼任され、千



松山市におけるがん征圧全国大会で受賞された同窓会長

ここに二十五年前の本学同窓諸兄の御指導、御支援に深く感謝すると共に、今後の教室の益々の発展、学問研究の進歩のため教室同門一同更に全員一致して努力していく所存であります。(文責、整形外科医局長、昭42卒 宮坂育)

受賞

○藤枝静男(勝見次郎)氏(昭和11年卒・浜松市東田町二〇六)・野間文学賞を受賞された。受賞の対象は「悲しいだけ」

○丸山俊男氏(昭和15年卒・埼玉県北葛飾郡幸手町南二・二一三)・藍綬褒章受賞・永年にわたる努力された功勞に對して、受賞された。

○関谷正一氏(大正13年医専卒・千葉県安房郡千倉町北朝夷)・第27回全国人権擁護委員連合会総会のさい、法務大臣賞を受賞された。

二十年以上人権擁護委員を務められ、地域社会に貢献した功績に對して表彰された。

人事移動

○百瀬剛一名誉教授(昭和13年卒)・鹿島労災病院院長より千葉労災病院院長に(54・10・1)

○小張一峰氏(昭和15年卒)・県西部浜松医療センター長より琉球大学医学部附属病院院長に(54・11・1)

○中沢幸一(昭和28年卒)・栃木県衛生部長より国立がんセンター運営部長に(54・4・1)

○庵原昭一氏(第一外科・昭和31年卒)・助教昇任・附属病院救急部副部長(54・12・1)

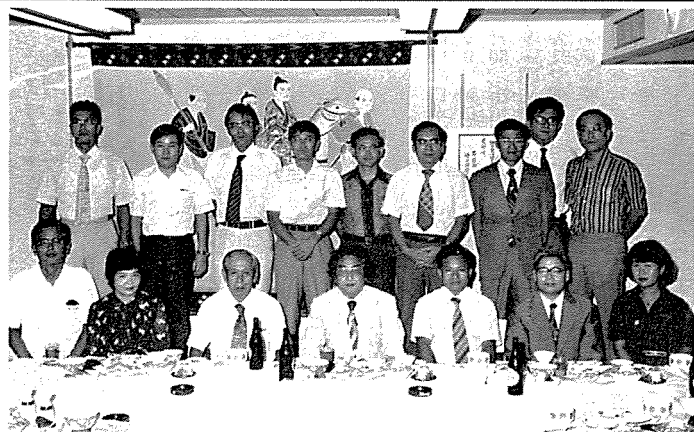
○内藤準哉氏(耳鼻科・昭和42年卒)・講師昇任(54・10・1)

○望月 博氏(産婦人科・昭和40年卒)国立横浜東病院へ転出(54・9・1)

沖縄ゐのほな会発足

国費留学制度により、徐々にその数をまわってきた沖縄県出身者のゐのほな会員や本土から転出してきた同窓生に懸念であった「沖縄県ゐのほな同窓会」が本年9月7日を期して結成された。これに至る経過として、若手の医学部卒業生の要望とゐのほな会本部から県在住者の会員の調査依頼が吉川のところまで来るなどもあり、これを契機に沖縄県ゐのほな同窓会を

結成することとなったものである。結成第一回の会合は、那覇市二ホテルで開催したが当日は吉川武彦(36年卒・琉大教授)の学生部長就任と高良宏明(44年卒)の琉大附属病院講師昇任の祝賀を兼ねて開かれた。当日は県内に在住する会員20名中17名の出席をみて、個人情報交換の交換に始まり、色々の話題が出て、誠に愉快な会となった。新たに結成された沖縄ゐのほな



会のメンバーを紹介すると左記の通りである。長田紀春(昭和17年医専・小児科開業)・真壁仁(27年・麻酔科・中部病院副院長)・安里洋(33年卒・太田産婦人科)・吉川武彦(36年卒・精神科・琉大教授)・宮里義弘(37年卒・小児科開業)・嶺井進(38年卒・脳神経外科開業)・古謝景春(39年卒・外科・琉大講師)・比嘉英磨(42年卒・県立那覇病院整形外科)・仲尾清(43年卒・県立那覇病院外科)・

堀川義文(43年卒・沖縄南部徳州会病院副院長外科)・高良宏明(44年卒・琉大講師整形外科)・真城弘史(44年卒・泉崎病院内科)・照屋功(44年卒・沖縄赤十字病院内科)・与那嶺(旧姓津山)和子(46年卒・沖縄協同病院内科)・上江州邦弘(47年卒・県立中部病院整形外科)・松田武美(47年卒・県立那覇病院外科)・金城(旧姓赤嶺)マサ子(47年卒・中央保健所内科)。このほかに喜瀬真功(27年卒・内科開業)・落合靖男(44年卒・整形外科・中部分園・整形外科)・上原哲夫(51年卒・県立中部病院外科)の諸兄も健在である。

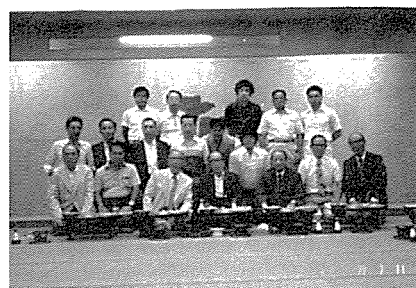
今回発足した本会は、会長長田紀春、副会長真壁仁(敬称略)で会務をす、め、県内の連絡は、嶺井・古謝、なお大学との連絡は、吉川が当ることとなった。私事に亘るが、去る49年8月琉大赴任に当って、脳研の萩原弥四郎教授(というより、私にとっては萩原季葉さん)が是非沖縄ゐのほな会を作るとに私に申されたが、なかなか進展しなかった。しかしここに至って気運が盛り上がり、こに本会結成をみた次第である。なお今後の連絡は、嶺井進(沖縄県浦添市字大平四六六・〒901-21・TEL 〇九八八七七八〇六)または吉川武彦(那覇市首里当蔵三十一・〒903・琉大教育学部・TEL 〇九八八三四一〇一)までお寄せ戴きたい。

(吉川武彦記)

宇都宮ゐのほな会開催

去る7月11日、宇都宮ゐのほな会が同市内にて盛大に開催された。宇都宮ゐのほな会は、会員数30名で最長老は、明治38年卒で本年99才の稲葉治三郎先生である。稲葉先生は別格として、現在御活躍中の先生のなかで最年長は、昭和10年御卒業の渡辺宗次先生である。宇都宮ゐのほな会は、毎年7月頃料理のうまい店で会を持つことを常としており、今年も例年通り各自の近況報告を行い、メーターのたり、雑談、聖談で和気藹々の内に数時間を過ぎました。

宇都宮市内には、国立栃木病院、済生会宇都宮病院の大病院があり、



この二大病院が慶応系であるため、市内の開業医にも慶応出身者が多く、かつ彼等のまとまりが非常に

良い。我々の仲間からも、栃木県医師会に理事一名、宇都宮市医師会に理事二名を送り、大いに頑張っております。

最近近くに独協医大・自治医大が設立されたので、堀江昌平教授(昭和23年卒)のほか多くの教室員も入会されたので賑やかに参りました。

末筆乍ら栃木県全域には、約百名のゐのほな会員が活躍しており、毎年秋に栃木県ゐのほな会を開き親睦を深めていることを御報告申し上げます。写真は、今年度の宇都宮ゐのほな会での記念写真です。前列右より、柴崎・五味淵・渡辺常・恩田・渡辺宗・茂・吉田・二列目右より、坂田・志賀・大塚師尾・大和田・糸井・和田・水沼三列目右より、塩田・鹿島・洲上(敬称略) (坂田早苗)

信州大学病理 重松秀一教授決定(昭39卒)



十月一日付で信州大学医学部第一病理学教室に着任致しました。本教室は石井善一郎教授次いで河合博正教授によって育まれ三代目の大役を果す責任が課せられています。私にとって喜ばしいことは病によって惜しくも逝かれた河合前教授がわが恩師岡林篤名誉教

授の御弟子でもあり、従って免疫病理への関心の強い環境に入れたことです。これまで河合先生が培われた基礎の上にぜひ免疫病理の分野で発展を遂げるべく努力したいと願っています。私は千葉の病理では馬杉腎炎を出発点として実験腎炎を足場に糸球体腎炎の発症機構の解析を行ってききましたので今後この方面での仕事を続けるつもりであります。腎臓病理学は電顕組織学と免疫学の進歩が相俟って病理組織の読みが臨床の実際面に貢献できるまで成長したとは

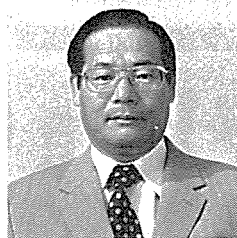
いまだ未解決の基礎的問題が多数残っています。

病理学は全身を扱うきわめて守備範囲の広い学問ではありますが多くの系統的疾患がしばしば腎に病変を惹起するところから腎を通して全身を見ることで貴重な事実の発見の機会にめぐまれるかもしれません。

信州大学にはすでに千葉から寄生出学教室に小島莊明教授が着任され多くの業績をあげておられ、また当地には多くのゐのほな同窓生の方々が活躍しておられますので、このような環境で仕事のできる自分は大変幸せだと感ずると共にぜひとも信州病理の発展に貢献したいと願う毎日です。

第17回

日本癌治療学会開催



市川平三郎氏

三輪清三先生、北村武先生も会長をなさった。

最近臨床各科とも癌治療に関する研究が盛んであり、そのあらわれとして本年度は一般演題五百余題に及んだ。今回は第一目に一般演題の発表があり、第一、第三

第17回日本癌治療学会総会は、去る9月30日より10月2日までの三日間、市川平三郎博士(昭和23年卒・国立がんセンター病院長)が会長で東京厚生年金会館・都市センター等、十会場にて盛大に開催された。本学会は、主として臨床各科の癌研究者が癌治療について討議する学会であり、発足は中山恒明先生らが中心となつて結成され、本年度で17回を数え、この間

型癌の化学療法・癌免疫療法の現況と問題点等)・パネルディスカッション二題・特別講演十題・招待講演(諸外国における癌診療の現況)・会長講演(集団検診の効果)等があり、盛会を極め、有益な学会であった。なお本学会は、このたび日本医学会の分科会加入が認められた。

第56回 千葉医学会学術大会 第25回 千葉県医師会学術大会 第18回 日医医学講座 連合大会

連合大会

昭和54年11月17日(土)午後2時30分より、千葉大学医学部附属病院第一講堂において開催された。本年のテーマは、パネルディスカッション・脳血管障害がとりあげられ、スピーカーは、
一、内科の立場から 本学脳研・

内科平山恵造教授
一、外科の立場から 東北大学医学部 鈴木二郎教授であり、講演後討論もあり、最近大きく進歩した。この領域の進歩が披露され、みのある集会であった。

昭和五十五年七月下旬より八月上旬に亘り開催される第23回東日本医科学学生総合体育大会夏季大会は、千葉大学が主管することになりました。本大会は東日本の医科学学生が一同に会する大規模なもので、当初十八校が始まりましたが、二十三回目の今日では参加校二十四校、二十五競技に一万人を越える参加者を数えております。

第23回東医体大会

千葉大学が主管で開催

このように大きな大会を運営するにあたり運営委員会が設けられ、千葉県内をはじめ各地に散らばる各競技会場の確保に努力するとともに、学内意識の高揚に努めております。各クラブともこれに答え、部門優勝並びに総合優勝をめざし日々の練習により一段と熱がこもってきております。

後日、大会組織並びに予算案等を御報告申し上げますが、「質素な大会」を旨としておりますもの

願ひ申し上げる次第でございます。東医体の運営について御助言、御計画等のございます時には、御遠慮なく委員の者に声を掛けて下さるよう重ねてお願い致します。

連絡先
第23回東日本医科学学生総合体育大会運営委員会
〒280 千葉市美郷町一ノ八ノ一
千葉大学医学部厚生係 白沢 浩
(医学部2年)

第19回日本麻酔学会 関東甲信越地方会 開催

昭和54年11月21日(水)東京新宿安田火災海上本社ビルで、米沢利英教授が会長で表記の学会が開催された。三会場で特別講演二題・麻酔医の問題点と将来・国立医療センター・山下九二夫博士
呼吸管理をめぐる諸問題・東北大学・天羽敬祐教授・一般演題一〇六題に及び、盛会であった。

るの は な 地区の植樹

るの は な 地区には、これまで多くの団体・個人の御厚志による植樹が行なわれ、年毎に年輪を増し、千葉大学の歴史を物語っている。

さき頃新病院落成に際して、病院周囲の環境整備が計画され、その一環として植樹がすめられ、そのための募金が始まった。事務的には、植樹委員会(委員長伊藤健次郎教授)ができて、各方面に募金を要請した。その結果二二会

この募金は、これらの植樹・移転・病院前庭・周囲の整備の費用にあてられた。

なお各クラスによつては、植樹のための募金も行なっている向もあると聞いているが、母校を愛する気持ちが植樹という形で表現されていることは慶ばしい次第である。大学側は、心のこもった樹木を立派に育てる努力が必要である。



新病院前の二二会寄贈になる黒松

富山医科薬科大学だより

窪田靖夫

富山医科薬科大学は昭和50年10月に開学、昭和51年4月第一回の入学生を迎え、只今、最高学年は四年次(千葉大医学部の学二)になります。医学部と薬学部とに和漢薬研究所が加わった、医学、薬学の総合的協力体制のある、国立の医育機関としては極めてユニークな存在です。

富山市の西郊、呉羽山の南端の丘の上、13万坪におよぶ広大な敷地に研究棟、教育棟、附属病院が完成、54年10月15日より診療を開始しました。研究室の窓からは北アルプスの白銀の山、能登半島と富山湾を望む恵まれた環境にあります。



富山医科薬科大学附属病院外来 (右側、病棟はこのうしろにある)。中央は研究棟、左側は教育講義棟

崎慎一郎講師(昭46・山田均、小林健一、野口哲夫助手(いずれも昭48)があり、眼科に窪田叔子講師(昭29)が、また泌尿器科には服部義博講師(昭48)・柳重行秋谷 徹助手(いずれも昭50)および石川成明助手(昭53)がおります。

さらに、附属病院の特色の一つに和漢診療部がありますが、その室長として寺沢捷平講師(昭45)が本年8月付けで赴任し、同診療部に土佐寛順助手(昭50)がおります。数えますと学内だけで十八名のろのはな会員が遠く千葉から北陸の地に赴任して来たわけです。遠くと申しましたが、東京から飛行機で一時間50分、夜行が七時間、時間の能率を考えると夜行が甚だ便利で、研究、教育上千葉大とコンタクトを持つスタッフは飛行機や列車で気軽に千葉大と往復しております。

10月10日には施設竣工、附属病院開院の式典が盛大に行なわれました。絶好の秋空のもとに開院の祝典が行なわれましたが、千葉大からは香月学長、井出医学部長佐藤病院長、萩原図書館長の各教授に小島事務局長、星野看護部長がおいでになって下さり、これ程のスタッフは他大学からは参加せず、ろのはな会の会員一同心から感激した処であります。

昭和51年度のろのはな会会員名簿によれば、富山県下では高岡市で野本昌三氏(昭32)が外科を、朝日町で橋 益永氏(昭20)が整形外科を開業しております。また洲崎丸丸氏(専19・内児)が城端

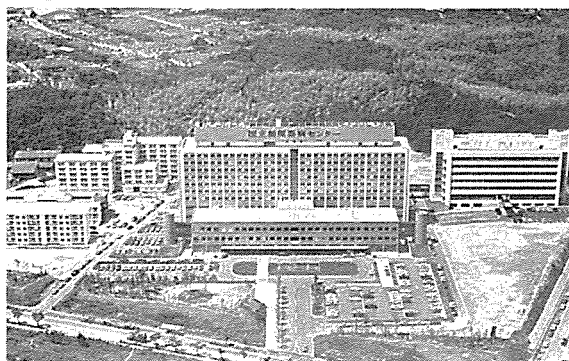
町で、小西善磨氏(専18・内科)が婦負郡で開業しております。富山県下のろのはな会の会合もいずれ近いうちに開き、親交を深めたいと考えております。

国立循環器病センターだより

中島伸之

同窓の諸先生には、国立循環器病センターという名前は、耳なれない方も多いと思います。その理由は、設立が新しいという事だけでなく、多分、関西にあるためであらうと思います。事実、当センターが、東の橋センターと並んで循環器病の専門施設として、大阪の万国博跡にほど近い、千里の丘に開設されたのは、昭和52年7月でした。病院にとっては、本年度は、その三年目に当り来年度でほぼその規模が完成される予定ですが、一方、研究所は、本年6月に竣工したばかりです。

病院は、阪大第一外科の教授であられた曲直部寿夫先生が、初代の院長に就任され、その規模は、三階建の外來管理棟と、地下一階地上十階の本館より成り、ベッド数は六四〇床です。特にこの内、第一ICU(二〇床)心臓血管外科用(CCU一〇床)心臓内科SCU二〇床(脳内



国立循環器センター全景

当時は山紫水明、山海の幸に恵まれており、日本の自然の美しさがいっぱい残っております。同窓諸氏には北陸においでの際は是非お立ち下さい。

七階建の建物内に、いろいろな研究グループが置かれ、基礎研究はもとより、臨床との緊密な共同研究も大きい目標となっていますので、今後の発展が大いに期待できます。また研究所内には、いくつかの共同実験室が整備されていて病院側のスタッフも自由に利用出来るようなシステムになっています。

本学出身者は現在七名です。研究所の実験開発治療部に、雨宮浩(昭35卒・二外)、宮島哲也(昭38卒・二外)の両先生が、主として移植の問題にとりくまれております。病院の方では、心臓血管部門に、中島伸之(昭36卒・一外)足立郁夫(昭45卒・一外)、高原善治(昭49卒・県立鶴舞・内科部門)小沢俊(昭43卒・三内、坂口明(昭48卒・三内)の諸先生が活躍されております。

センター自身、まだ誕生まもない施設ですが、今後大いに発展すると信じています。レジデント制度もありますので、とくに同窓の若い諸兄に、積極的に関心を持って下さる様をお願いします。

伊藤健次郎教授(第一外科)退官行事

伊藤教授には、55年4月1日付で定年退官にともない、近く記念行事実行委員会が結成されるが、現在までに決定している予定行事は、次の通りである。

最終講義 55年2月20日(水) テーマ 血管外科の最近の進歩 記念式典 55年3月15日(土)

第二回常任理事会開催

本年度第二回のはな同窓会常任理事会は、10月26日記念講堂南側会議室で、小林会長、井出医学部長、村山常任理事等多数出席し開催した。協議事項、報告事項のあらましは左記の通りである。

一、名簿作成について——名簿作成は準備に進み、現在校正の段階であり、本年度中には発行予定である。

二、東日本医学部体育大会について——55年7月下旬、千葉大学医学部が主管校で開催される東医体学会に、同窓会として出来る限りの協力をする事になった。

三、モノレール問題について——井出医学部長より、これまでの経過と本学の態度について説明があった。

ふたむかし前の話

村山智(昭26卒・前編集長)

皇太子御成婚。伊勢湾台風。ソ連宇宙ロケット発射。メートル法実施。第一回レコード大賞。カメラ族出現。週刊誌大流行。そして日本人の平均寿命男六五才、女六九・六才とのびる。こんなことのあった年、昭和34年は岸内閣の時代であった。そしてこののはな同窓会報が形式を改めて改刊第一号(3月1日号)を出した年でもあった。その号のトップ記事は解剖学の森田秀一教授、外科学の新入生歓迎会で専門課程に入った

者を代表して挨拶を述べたのは玉置哲也君とあるが現在の富山医大の整形外科科教授である。また大学院入学者のリストが掲載されているが、本学部でいえば第二病理の近藤教授はじめ、そのうちの10名はすでに教授の肩書で学内外あるいは外国で活躍している。学位論文通過者のリストのはじめ

故石川芳光先生追悼の辞



是有水昇(現・放射線科教授)とあり、人事異動欄をみると助手採用、永野俊雄(現・第二解剖学教授)とある。やはりこれは丁度今年で20年経ったというより、「ふたむかし前の話」といった方がふさわしいようだ。記憶するだけではいけない。上手に思い出さう。だといふ小林秀雄の言葉を思う。

労働福祉事業団千葉労災病院長石川芳光先生は去る八月二十五日癌性腹膜炎の為に千葉労災病院で逝去された。享年五十三才。先生は本学昭和二十五年卒。インサート、第二外科教室を経て昭和二十九年、整形外科教室新設に伴い、故鈴木次郎教授の下で新教室の創設に当り、昭和三十三年、助教に昇任された。教室に於ては各分野で中心となり、脊椎外科、四肢外傷外科等の学会発表、論文は数多く、又後輩の育成にも尽力された。昭和四十年、千葉労災病院の開院に際しては建設段階より関与し、開院と同時に整形外科部長に就任、縦横に手腕を発揮された。特に脊椎損傷の治療、リハビリテーションについては優れた業績を残された。就中頸鎖損傷に対する

訃報

○大原芳雄・大正元年卒・昭和54年4月15日死去・青木市梅郷31896-12

○近藤光雄・昭和14年卒・昭和54年4月23日死亡・神戸市兵庫区石井町7-12-11

○小林二郎・昭和12年卒・昭和54年5月27日死亡・土浦市文京町6-16

○為田茂男・大正13年卒・昭和54年6月9日死亡・夷隅郡御宿町新

第52回解剖体祭

第52回千葉大学医学部解剖慰霊祭は昭和54年10月20日(土)午後2時より医学部記念講堂において遺族、大学職員、本学医学部学生看護学校学生ら多数が参加して厳かにおこなわれた。まず全員が起立して二六五名の霊に目撃した後読教、続いて主祭壇により故人の名前が個々に呼びあげられ、参列した遺族の涙をあらたにした。祭式委員長の井出医学部長が解剖の重要性と故人および遺族に対する感謝の言葉を述べ、来賓の千葉県知事の挨拶の後、祭式委員長、遺族に続いて全員が焼香をし冥福を祈った。焼香の後、祭式委員長の挨拶を最後に、約二時間の慰霊祭を厳粛に終了した。

海外だより

最近欧米に留学した左記の会員諸兄より連絡がありました。住所をお知らせします。

長谷川修司氏(脳研助教) 昭和36年卒・Laboratory of Development Neurobiology, NIH, 10201 Grosvenor Pl. Apt. 106, Rockville MD, 20852, U.S.A.

編集後記

○昭和54年も年末近くになりまして、会報71号をお届けします。毎日忙しい仕事を持つている編集委員の手によって、年四回の刊行を目標にして、編集を続けております。この号も多くの方々から貴重な原稿をお寄せいただき、お礼申し上げます。これからも各地のはな会だより・クラス会だより・随想等ご投稿願えば幸いです。写真(白黒が望ましい)がありましたら、なお結構です。

この会報を通じ、会員相互の心のふれあいができれば、意義があると考えております。よい年をお迎え下さい。(奥井勝二)

年7月15日死亡・安房郡富浦町多田良271

○野上 一・昭和24年卒・昭和54年10月18日死亡・土浦市東崎町618

○安西吉夫・昭和23年卒・昭和54年2月28日死亡

謹しんで哀悼の意を表します。

広瀬賢次氏(一内・講師) 昭和28年卒・Gestroom, Institute of Mathematics, Aarhus University, 8000, Aarhus, Denmark.

中村宣生氏(看護学部助教) 昭和41年卒・Abteilung für Pathologie, Med. Hochschule Lubeck, Ratzeburger Allee 160.

山森秀夫氏(小児外科) 昭和47年卒・4195, Yellow Birch, #4, Memphis Tennessee, 38128, U.S.A.